論　文

近畿型経筒の創出・展開

―東北地方を中心に―

木　下　博　文※

はじめに

11 世紀初頭の寛弘四（1007）年、藤原道長の大和金峯山詣に端を発した経塚造営は、12 世紀に入り全国展開する。その契機となったと見られるのが近畿型経筒の創出である。

北部九州とともに経塚造営の一大中心地である近畿において、経筒のパターンが生み出されたことが、他地域における経塚造営を促進する働きをし、その直輸入・模倣と見られる出土例が全国各地で確認される。平泉を中心とする東北地方は、藤原氏の存在も相まって、近畿型経筒の展開先として大いに注目できる。

本稿では近畿型経筒を軸に東北地方における経塚造営のあり方・特質を跡付けたい。また現在岩手大学平泉文化研究センターにおいて進められている「東アジア的視点からとらえる日本の経塚信仰研究」について、今後の展望を述べたい。

第 1 章　「近畿型経筒」の定義

第 1 節　北部九州における経筒の特徴

経塚は仏教経典を地下に埋納して造られた遺跡であるが、その埋納にあたり経典を納入する銅･陶･石・木など様々な材質の容器を用いる。これを経容器または経筒と呼ぶ。本稿では以下経筒とする。

経筒には各地域によって際立った特徴のあることが先行研究によって明らかにされている。特に北部九州において先進されてきた。平安時代後期に造営された経塚の内、約６割近くを北部九州・近畿の２地域で占めており、かつ２地域は数がほぼ拮抗している。

近畿の経筒の特徴を抽出するにあたり、北部九州のそれを押さえておくことは、違いを明瞭にするためにも有意義と考えられる。そこで本項では北部九州における経筒の特徴を先行研究に依拠して概観しておきたい。

まず地域全体、さらにその中の小地域ごとに明確な経筒のタイプが複数存在している。

地域全体としては「九州型」経筒として、銅製積上式経筒・中国産陶製経筒・滑石製経筒の３つが挙げられている（小田 1966・1968）。経筒全体の形姿が塔を意識していることから、法華経見宝（けんほう）

※　福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

塔品の一説「釈迦が霊鷲山で法華経を説いた時、地中から宝塔が湧き出て、その中から多宝仏が現れ、賛美した。」を表したものと考えられている。

銅製経筒の広域・狭域型として「四王寺型」・「求菩提型」・「永満寺型」・「鎮国寺型」・「国東型」・「武蔵寺型」などが提唱されている（杉山 1985、村木 1998）。これらの銅製経筒に共通する特徴は以下のものが挙げられる。

① 筒身に突帯（帯状の突起）をめぐらす。

② 全体的に細身で、筒身の口径と高さの比が１対３～１対５である。

杉山洋氏は四王寺型経筒をⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に細分するにあたり、径口指数[1]を用いている。それによると、初期に当たるⅠ類では 40 を越えていたが、時期が下りⅡ・Ⅲ類になるとともに 30 代以下となっている。求菩提型に至っては 20 代となり極端に細身のものが出現する。これは後述する近畿と比較してより注意すべき点である。

③ 瓔珞（ガラス玉･金属製板を連ねた垂れ飾り）や、経筒の底板に銅鏡を利用する例が多い（表１・２）。

④ 銅板製経筒が極端に少なく、銅鋳製 164 本に対し銅板製 21 本である（表４）。

第２節　近畿における経筒の特徴

続いて本論の核となる近畿の経筒の特徴について、押さえておきたい。

① 鍍金・銀を施す例が比較的多い（表３）。

現存最古の藤原道長による金峯山埋納寛弘四（1007）年銘銅板製経筒[2]が鍍金であることに発し、全国的に集成した結果、他地域と比較して鍍金・銀例がやや多くみられる。

② 筒身に突帯がない。

これは九州と比較した場合、次の③に示す経筒の法量とともに最も顕著な違いである。

③ 九州より太身で、筒身の口径と高さの比がほぼ一定（約１対２）している。

径口指数を用いると、金峯山経筒は 45 を示す。これを最古・最大とし、以降の経筒をプロットすると、ほぼ一直線上に分布する（表６）。つまり年代が下るにつれて、筒身の口径と高さがともに小さくなっているものの、両者はほぼ一定の比を保っていることを示す。従って径口指数を年代的指標とはできないが、筒身の口径と高さの実数を時期ごとの平均値と比較対照することにより、年代的位置づけを推測することが可能である（表５）。

そして全時期を通じて経筒の法量に何らかの規範を与えたものが、他ならぬ金峯山経筒とみなされるのである。

④ 銅板製が比較的多く、銅鋳製 109 本に対し銅板製 36 本である（表４）。

金峯山経筒が銅板製であることに発し、九州に比較してやや銅板製の比率が高いと見なせよう。

⑤ 蓋の盛り上がりに段をつける（村木 1998）。

経筒の筒身自体には顕著な特徴がみられないため、蓋の形態に着目して筆者は以下の通り３つに分類した（図１）。

Ⅰ類… 蓋は１段盛り上がりで、頂部に円形の鈕台がある。蓋に取り付く宝珠鈕は、宝珠と請花が明確に分かれる。宝珠の形は先端が尖らず、下部に重心がある。筒身は口径 12㎝以上、高さ 24㎝以上である。

基準資料は鳩ヶ峰経塚（京都府八幡市）の永久四（1116）年銘銅鋳製鍍金経筒。年代は

1） 筒身口径÷筒身高×100　数値が小さいほど細く、大きいほど太いことを示す。

2） 以下、金峯山経筒と略称する。

1110 年代に収まると考えられる。

Ⅱ類…　蓋は２段ないし３段盛り上がりで、頂部に円形の鈕台がある。中には鈕台の周りに二重突帯をめぐらすものもある。宝珠鈕はⅠ類と同様。また、1150 年代には、筒身下部を外側に張り出して基台を凝らすものが現れる。筒身は口径 12 ～ 13㎝、高さ 24 ～ 25㎝である。

基準資料は鞍馬寺経塚（京都市左京区）の保安元（1120）年銘銅鋳製経筒、粉河経塚（和歌山県粉河町）の天治二（1125）年銘銅鋳製経筒、高男寺経塚（兵庫県三木市）の仁平三（1153）年銘銅鋳製鍍銀経筒、比井王子神社経塚（和歌山県日高町）の保元三（1158）年銘銅鋳製経筒、朝熊山第三経塚（三重県伊勢市）の平治元（1159）年銘銅鋳製経筒。年代は 1120 ～ 1160 年の間に収まると考えられる。

Ⅲ類…　蓋は２段ないし３段盛り上がりだが、その高さがかなり低くなり、平らに近づく。頂部に円形の鈕台があるが、Ⅱ類のように二重突帯をめぐらすものはなくなる。宝珠鈕は宝珠と請花の区別がなくなり、宝珠に直接頸が付くようになる。宝珠の形は球形や雨垂れ形のものも現れる。筒身は口径 10 ～ 11㎝、高さ 22㎝程度である。

基準資料は、金剛山経塚（大阪府河内長野市）の承安五（1175）年銘銅製経筒、若宮八幡宮経塚（大阪府能勢町）の養和元（1181）年銘銅鋳製鍍銀経筒。年代は 1160 ～ 1200 年の間に収まると考えられる。

「近畿型経筒」とは上記の特徴を複数持つものと定義する。

第２章　東北地方における近畿型経筒の展開

全国の経塚の内、東北地方の占める割合は約１割強である。以下にその最初期から跡付けていき、その過程で近畿型経筒がどのように関わるかを見ることとしたい。

現状における東北最古の経筒は、松野千光寺経塚（福島県喜多方市）の石櫃（ひつ）（大治五（1130）年銘）である。これには塔の屋根を模したと見られる宝形（ほうぎょう）の蓋が伴っており（木口 1995）、北部九州の影響の可能性がある。同経塚では他に 12 世紀中葉以前とみられる銅鋳製経筒も出土しており、明らかに時代の違う遺物が混在し、複数期に渡って造営されたようである。

東北地方では、現状では 12 世紀初頭の近畿型Ⅰ類が確認されておらず、初見はⅡ類からとなる（図１・２・３・４）。このことから奥州藤原氏初代清衡の頃にはまだ銅製経筒の受容がなされていない可能性も想定される。

Ⅱ類の年代観から近畿型経筒の展開は 12 世紀中葉、1150 年代からと見られる。二代基衡から三代秀衡への代替わり期に相当し、分布域は奥六郡と呼ばれる地域（現奥州市）を中心としている。

その後 12 世紀後半代に造営が増える。これは藤原氏による近畿型経筒を用いた経塚造営が各地における造営を促したのではないかと考える。

ここで近畿の影響をうかがう上で問題とすべき点がある。それはいわゆる「東国型」経筒の再評価である。

東国型経筒とは、経筒の筒身と底部を一体で鋳造した重厚な作りの銅製経筒である。12 世紀中葉以降東国一帯に分布する。これを杉山洋氏は法量からより太身の「那智タイプ」と細身の「神倉山タイプ」に二分した（図５　杉山 1983）。村木二郎氏はこれらを一鋳式経筒として一括している（村木 2003）。

先行研究では同時期に法量の異なる２つのタイプの経筒が存在する理由・背景についての説明はな

されていない。その点について検討・考察したところ、細身の「神倉山タイプ」については、近畿における経筒の法量変遷とほぼ同じであることがうかがえた。細身の「神倉山タイプ」は近畿の影響を受けて成立した可能性が考えられる。

この視点から注目すべき例は、上ノ原経塚（福島県いわき市）の銅鋳製経筒（財団法人いわき市教育文化事業団 1998）である（図６）。筒身が東国型で重厚だが、蓋は突帯で段を付けたように見せ、筒身に三段の突帯を巡らせており、東国・近畿・北部九州の特徴が混然一体としている。

このような各地域の特徴が混然一体となる例として、特に注目すべき例として１点挙げておく。

東城寺経塚（茨城県土浦市）の天治元（1124）年銘銅鋳製経筒（土浦市博物館 2021）である（図７）。筒身は覆筒式と呼ばれ、口が上下逆の覆い被せるもので、筒身の側面上端に瓔珞垂下の線刻を施している。筒身の高さと口径の比は近畿に近似する。銘文は陽鋳で関東・東北で見られるものである。その内容から檀主平致幹（むねもと）、勧進延暦寺僧経暹（きょうせん）による造営であることが明らかである。

明治 35（1902）年に実施された和田千吉による発掘調査報告（和田 1904）には、相輪鈕を持つ蓋の図が掲載されており、北部九州の積上式経筒の存在をうかがわせる。このことから北部九州とのつながりが明確にある一方、それ一辺倒ではなく、近畿の影響も垣間見えることが大変興味深い。

以上述べてきたように、特に銅製経筒の地域的特徴を明確にし、その組み合わせを見ていくことで、その地域の経塚造営という流行の取り入れ方が見えてくる。その当時の情報のやり取りについて地域ごとの違いがみえ、より立体的な社会の復元につながっていくと考える。

おわりに－今後の展望－

最後に東北地方における経塚信仰研究において、今後どのようなことが問題となるのか、そしてそれが東アジアにおける仏教文化研究にどうつながっていくのか、私見を述べてまとめに替えたい。

奥州平泉に華麗な仏教文化を花開かせた最大の立役者は藤原清衡である。先述したように、清衡と東北地方における経塚造営の導入を直接結び付ける材料は、現状としては乏しい[3)]。

しかしそれは清衡が経塚を造らなかったということを意味しない。そう考える根拠は、現存最古の経塚造営の当事者である藤原道長との関わりである。

清衡による中尊寺建立を中心とした平泉立国事業の中に、道長の仏教信仰との共通点がしばしば見られることが、先行研究によって明らかとなっている（入間田 2014、斉藤 2014）。

それによると『吾妻鏡』文治五（1189）年九月十七日条所載「寺塔已下注文」に記される中尊寺建立最初期の伽藍として、長治二（1105）年創建の「一基の塔および多宝寺」が注目される（表７）。多宝寺とは多宝塔を指し、密教系のそれではなく、法華経見宝塔品の多宝・釈迦如来の二仏並座に基づくものである。

その類例が少ない中で、道長が宇治木幡に建立した藤原氏一族の菩提寺である浄妙寺が挙げられる。この寺は法華三昧堂を本堂とし、多宝塔とも相まって法華経信仰に貫かれた寺院であった。

他に清衡が中尊寺境内に建立した伽藍として釈迦堂があるが、内部に百一体の釈迦如来像を安置する建物で金堂の位置づけがなされていた。これも類例が少なく道長の法成寺釈迦堂の例が最初とされる。

3） 従来金鶏山経塚は清衡造営とみなされてきたが、銅製経筒の型式および渥美焼袈裟襷文壺の年代観から、早く見ても基衡以降の造営と筆者は見ている。

八重樫忠郎 2002「平泉・金鶏山考」『磐井地方の歴史 創立五十周年記念論文集』岩手県南史談会

このように清衡が国造りの始めに位置づけた寺院建立が、経塚造営の根本である法華経とその中心教主である釈迦如来への信仰に重きが置かれており、その範として道長があることはより注目されてよい事実と考える。

中尊寺は、南は白河、北は津軽外ヶ浜に至る基幹道路・奥大道のちょうど中間点に位置する関山丘陵に建立されている。その最高所に奥大道を挟んで多宝寺と対して建てられた一基の塔については、正確な場所も具体的な内容も分かっていない。ランドマーク的な三重の層塔とみる説（菅野成寛・冨島義幸）、清衡の遺体とともに発見された曳覆曼荼羅に記された真言を基に仏眼仏母像という密教の法身仏を安置した塔とみる説（長岡 2021）がある。いずれも文献史･建築史･美術史からのアプローチで、層塔という地上の構造物と見ることで共通している。

ここで考古学から一つ仮説提起をしたい。それは「一基の塔」とは経塚ではないかということである。経塚も法華経という法身舎利を納めた一種の塔である[4)]。一基の塔が山頂に造られたという点から可能性はある。

清衡は紺紙金銀字交書一切経の書写事業を行っている。この書写形態は当時の最高級貴族によって実施されており､道長が金峯山に埋納した経典も紺紙金字経であった。道長に範を取った清衡ならば、紺紙金字法華経を関山山頂に埋納し、標識を立て[5)]、国土建設の原点としたとの想定も許されよう。そしてこれが事実と証明されたならば、東北地方における経塚造営の導入について考える上で、多大な影響を及ぼすことになろう。

この他に東北地方における仏教文化の浸透・定着過程を考える上で、経塚造営とも関わりのある遺物として、銅鏡の姿を映す面に神仏の像を線刻した鏡像がある。近年の出土例では、昼場沢遺跡（岩手県久慈市）出土の瑞花双鳳八稜鏡がある。東北地方では秋田・岩手両県において複数例知られており、全国的に見ても稀である。その伝播に天台宗延暦寺が関わっている節があり、無視できない。

このように東北地方は仏教文化研究にとって、とても興味深いテーマを与えてくれる絶好のフィールドである。研究に当たっては今後より広い視野から行うこと、発想の転換が必須である。

例えばこれまで経塚造営を考える上での大前提として、弥勒信仰を重視する傾向が顕著であり、固定化されている。今は原点として法華経・釈迦如来信仰に立ち戻って見直すべきではなかろうかと考える。そうすることで未だ明らかとなっていない、経塚の「始まり」と「終わり」の要因・背景を東アジア的視点から追究することが可能になると考える（木下 2014）。

道長・清衡両人の仏教関連事業も大陸との関わりなしで考察することは、難しくなっている。先述した金銀字による経典書写事業は中国江南地域とのつながりから注目されており、格好のケーススタディ対象となっている。

現在岩手大学平泉文化研究センターでは、中国江南および朝鮮半島との関連から経塚の起源についての研究が進められている。過去に注目されたが以降ほとんど進展してこなかった研究課題であり、新しい傾向といってよい。今後注視していきたい。

4） 道長の金峯山埋納銅板製経筒の銘文に「埋法身舎利」と刻まれている（関秀夫編 1985『経塚遺文』東京堂出版 10 号）。
保坂三郎 1985「藤原道長の経塚」宮家準編『民衆宗教史叢書６　御嶽信仰』雄山閣

5） 道長の金峯山埋納例では、金銅燈楼を立て、その下に経典を埋納し､常燈を供するとの記述が御堂関白記にある（『御堂関白記』寛弘四年八月十一日条）。

付記

本稿は 2021 年 3 月 24 日に岩手大学で開催された平泉文化セミナーにおける口頭発表の内容をまとめたものである。立論の趣旨・根拠は 1997 年 1 月京都府立大学文学部史学科に提出した卒業論文を基にしている。提出以来現在までに長年月が経過し、その間に村木二郎氏をはじめ新たに発表された研究成果もある。本稿をまとめるにあたり、それらを踏まえながらも、大幅な趣旨変更は行っていない。それは未だ公に発表・認識されていない内容があるものと考えるからである。

参考文献

小田富士雄 1966「九州発見の陶製経筒」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館

小田富士雄 1968「西日本の石製経筒」『日本歴史考古学論叢』２　雄山閣

村木二郎 1998「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』第 40 集

村木二郎 1998「近畿の経塚」『史林』81-2

村木二郎 2003「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 集

杉山洋 1985「四王寺型経筒―村上経塚出土遺物の紹介―」『ＭＵＳＥＵＭ』143

杉山洋 1983「熊野三山の経塚」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

木口勝弘 1995『新版奥州経塚の研究』大盛堂印刷出版部

土浦市立博物館 2021『東城寺と「山ノ荘」―古代からのタイムカプセル、未来へ』第 42 回特別展図録

和田千吉 1904「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」『考古界』4-5・6

財団法人いわき市教育文化事業団編 1998『上ノ原経塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第 55 冊　いわき市教育委員会

入間田宣夫 2014『藤原清衡　平泉に浄土を創った男の世界戦略』ホーム社

斉藤利男 2014『平泉　北方王国の夢』講談社選書メチエ 588

長岡龍作 2021「第一章草創期中尊寺伽藍の構想と信仰」

菅野成寛監修　浅井和春・長岡龍作編『平泉の文化史３　中尊寺の仏教美術　彫刻・絵画・工芸』吉川弘文館

木下博文 2014「経塚の起源･源流についての素描～福岡市･釜山市文化財担当者交流事業の成果から～」『博多研究会誌』第 12 号

挿図出典

図２－１・２・３　蔵田蔵 1965「経塚論９」『MUSEUM』177

４・５　兵庫県立歴史博物館 1992『博物館普及資料第 10 集　兵庫の経塚』

６　『愛媛県史　資料編　考古』1986

７・８　蔵田蔵 1963「経塚論２」『MUSEUM』148

９　白鷹町教育委員会 1988『笠松山遺跡発掘調査報告書』

10　吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図３－１・２・３　蔵田蔵 1965「経塚論８」『MUSEUM』176

４・５　兵庫県立歴史博物館 1992『博物館普及資料第 10 集　兵庫の経塚』

６　蔵田蔵 1966「経塚論 14」『MUSEUM』184

７　吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

表１　瓔珞垂下経筒一覧

	旧国	経塚名	所在地	紀年銘	製作技法	型式	径口指数
No. 1	常陸	東城寺	茨城県土浦市	天治元（1124）	銅鋳	覆筒	47
No. 2	伊豆	伊豆山神社	静岡県熱海市伊豆山	永久五（1117）	銅鋳		36
No. 3	美濃	養老神社	岐阜県養老郡養老町		銅板		
No. 4	山城	鞍馬寺	京都市左京区鞍馬		銅鋳	近畿Ⅰ	
No. 5	山城	鞍馬寺	京都市左京区鞍馬		銅鋳		
No. 6	山城	鳩ヶ峰	京都府八幡市	永久四（1116）	銅鋳	近畿Ⅰ	
No. 7	播磨	宮林	兵庫県小野市		銅板		41
No. 8	伊予	奈良原山Ａ	愛媛県今治市玉川町		銅鋳		68
No. 9	讃岐	千手院	香川県観音寺市大野原町萩原		銅板		52
No.10	周防	仁保八幡宮	山口県山口市		銅鋳		
No.11	伯耆	伯耆一宮	鳥取県東伯郡湯梨浜町	康和五（1103）	銅鋳		
No.12	筑前	武蔵寺	福岡県筑紫野市武蔵	康和五（1103）	銅板		
No.13	筑前	武蔵寺第２号	福岡県筑紫野市武蔵		銅鋳	四段積上	
No.14	筑前	武蔵寺第３号	福岡県筑紫野市武蔵		銅板	武蔵寺	
No.15	筑前	武蔵寺第４号	福岡県筑紫野市武蔵		銅板	武蔵寺	28
No.16	筑前	武蔵寺第９号	福岡県筑紫野市武蔵		銅板	武蔵寺	
No.17	筑前	武蔵寺第 11 号	福岡県筑紫野市武蔵		銅板	武蔵寺	31
No.18	筑前	四王寺山	福岡県糟屋郡宇美町	保安四（1123）			25
No.19	筑前	四王寺道Ｄ	福岡県糟屋郡宇美町		銅鋳		
No.20	筑前	宝満山Ｂ	福岡県筑紫野市原	天永元（1110）	銅鋳	四王寺Ⅲ	
No.21	筑前	津丸高平	福岡県福津市		銅鋳	二段積上	
No.22	筑後	観音寺８号	福岡県久留米市田主丸町		銅鋳	四王寺	
No.23	筑後	東谷	福岡県久留米市田主丸町		銅鋳		
No.24	筑後	黒崎観世音塚古墳１号	福岡県大牟田市岬		銅鋳	四王寺	
No.25	豊前	求菩提山護摩場	福岡県豊前市求菩提		銅鋳	求菩提	24
No.26	豊前	求菩提山普賢窟	福岡県豊前市求菩提	康治元（1142）		銅箱	
No.27	豊前	金山	福岡県北九州市小倉南区守恒字金山		銅鋳		
No.28	豊後	政所	大分県大分市政所	長治元（1104）	銅鋳	国東	
No.29	豊後	三宮神社	大分県豊後大野市緒方町上自在	永久三（1115）	銅鋳	四王寺	
No.30	肥前	仏法堤	佐賀県杵島郡大町町	嘉保三（1096）	銅鋳		48
No.31	肥前	山崎	佐賀県多久市山崎	天治元（1124）	銅鋳	四王寺Ⅲ	31
No.32	肥前	千々賀	佐賀県唐津市千々賀		銅板	武蔵寺	43
No.33	肥前	せせり谷	佐賀県唐津市相知町	天永四（1113）	銅板	武蔵寺	35

表２　底板に銅鏡を転用する経筒一覧

	旧国	経塚名	所在地	紀年銘	製作技法	型式	径口指数
No. 1	陸奥	田東山５号	宮城県気仙沼市本吉町、本吉郡南三陸町歌津		銅鋳		41
No. 2	出羽	松岡	秋田県湯沢市松岡字外堀		銅板		37
No. 3	上総	千葉寺	千葉県千葉市		銅板		38
No. 4	伊豆	三明寺	静岡県沼津市	建久七（1196）	銅板		
No. 5	伊豆	三明寺	静岡県沼津市	建久七（1196）	銅板		
No. 6	播磨	石原	兵庫県西脇市黒田庄町	承安四（1174）	銅鋳		50
No. 7	美作	高井谷	岡山県御津郡建部町		銅板		
No. 8	安芸	宮地川	広島県豊田郡本郷町		銅板		
No. 9	長門	熊野町	山口県下関市		銅鋳		
No.10	伊予	奈良原山２号	愛媛県今治市玉川町		銅鋳		50
No.11	伊予	三島神社	愛媛県西予市宇和町		銅板		40
No.12	筑前	永満寺	福岡県直方市永満寺字宅間	天永元（1110）	銅鋳		
No.13	筑前	永満寺	福岡県直方市永満寺字宅間		銅鋳		
No.14	筑前	山田	福岡県宗像市山田字横山	大治五（1130）	銅鋳	鎮国寺	32
No.15	筑前	有木	福岡県宮若市	元永二（1119）	銅鋳	永満寺	
No.16	筑前	都市八幡宮	福岡県宮若市沼口	保元二（1157）	銅鋳		
No.17	筑前	長福寺	福岡県飯塚市太郎丸		銅鋳	求菩提	
No.18	筑後	岩本	福岡県大牟田市岩本		銅鋳	四王寺Ⅲ	
No.19	豊前	ハリヤ	福岡県北九州市小倉南区蒲生字ハリヤ	永久六（1118）	銅鋳	鎮国寺	
No.20	豊前	松田１号	福岡県京都郡みやこ町勝山	大治二（1127）	銅鋳	求菩提	24
No.21	豊前	求菩提山上宮第８区	福岡県豊前市求菩提	保延六（1140）	銅鋳	求菩提	23
No.22	豊前	求菩提山	福岡県豊前市求菩提	保延六（1140）	銅鋳	求菩提	22
No.23	豊前	求菩提山上宮第 19 区	福岡県豊前市求菩提		銅鋳	求菩提	23
No.24	豊前	求菩提山上宮第 19 区	福岡県豊前市求菩提	康治二（1143）	銅鋳	求菩提	24
No.25	豊前	求菩提山護摩場	福岡県豊前市求菩提		銅鋳	求菩提	24
No.26	豊前	妙楽寺	大分県宇佐市		銅鋳		
No.27	豊後	清浄光寺	大分県国東市国見町		銅鋳	国東	
No.28	豊後	東光寺　表採１	大分県杵築市		銅鋳	国東	
No.29	豊後	由布院	大分県由布市	康和五（1103）	銅鋳	国東	
No.30	豊後	政所	大分県大分市		銅鋳	国東	
No.31	豊後	上坂田	大分県竹田市	康治二（1143）	銅鋳		
No.32	肥前	山崎	佐賀県多久市山崎	天治元（1124）	銅鋳	四王寺Ⅲ	31
No.33	肥前	霊仙寺	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町松隈	康治元（1142）	銅鋳		31
No.34	肥前	霊仙寺	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町松隈	康治元（1142）	銅鋳		32
No.35	肥前	霊仙寺	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町松隈	康治元（1142）	銅鋳		
No.36	肥前	市丸	佐賀県唐津市浜玉町		銅鋳		27
No.37	日向	早水神社	宮崎県都城市		銅鋳		

表３　鍍金・銀を施す経筒一覧

	旧国	経塚名	所在地	紀年銘	製作技法	型式	径口指数
No. 1	出羽	松岡	秋田県湯沢市松岡字外堀		金銀　銅板		37
No. 2	伊豆	三明寺	静岡県沼津市	建久七（1196）	金　銅板		
No. 3	伊豆	伊豆山神社	静岡県熱海市伊豆山		銀　銅鋳		
No. 4	武蔵	松蓮寺	東京都日野市	長寛元（1163）	金　銅鋳		
No. 5	山城	鞍馬寺	京都市左京区鞍馬		金銀　銅板	近畿型Ⅰ	
No. 6	山城	鞍馬寺	京都市左京区鞍馬		金　銅鋳		
No. 7	山城	清水寺	京都市左京区		金　銅鋳	近畿型Ⅰ	
No. 8	山城	鳩ヶ峰	京都府八幡市	永久四（1116）	金　銅鋳	近畿型Ⅰ	
No. 9	近江	比叡南岳	滋賀県大津市		金　銅板	近畿型Ⅰ	
No.10	近江	九条	滋賀県大津市		銀　銅鋳	近畿型Ⅲ	
No.11	大和	金峯山	奈良県吉野郡天川村	寛弘四（1007）	金　銅板		45
No.12	和泉	施福寺	大阪府和泉市	保延五（1139）	金　銅板		
No.13	摂津	若宮八幡宮	大阪府豊能郡能勢町	養和元（1181）	銀　銅鋳	近畿型Ⅲ	
No.14	但馬	入佐山	兵庫県豊岡市出石町		銀　銅鋳		39
No.15	播磨	高男寺	兵庫県三木市	仁平三（1153）	銀　銅鋳	近畿型Ⅱ	50
No.16	伊予	実報寺	愛媛県西条市		金　銅板		
No.17	伊予	奈良原山Ａ	愛媛県今治市玉川町		金　銅鋳		68
No.18	伊予	堂ヶ谷	愛媛県伊予市	久安六（1150）	金　銅鋳	近畿型Ⅱ	47
No.19	讃岐	千手院	香川県観音寺市大野原町萩原		金　銅板		52
No.20	筑前	有毛太郎坊山	福岡県北九州市		金　銅板		
No.21	筑前	武蔵寺第４号	福岡県筑紫野市		金　銅板	武蔵寺型	28
No.22	筑前	四王寺山	福岡県糟屋郡宇美町	保安四（1123）	金	宝塔	
No.23	筑前	原	福岡県太宰府市大宰府字原		金　鉄鋳		
No.24	筑前	太宰府天満宮境内	福岡県太宰府市	久安三（1147）	金　土		
No.25	豊前	求菩提山普賢窟	福岡県豊前市	康治元（1142）	金　銅板	箱	
No.26	豊前	長井	福岡県行橋市	大治二（1127）	金　銅板	六角宝幢	
No.27	日向	大島神社	宮崎県宮崎市	元永二（1119）	金　銅鋳		

表４　全国経筒製作技法別内訳

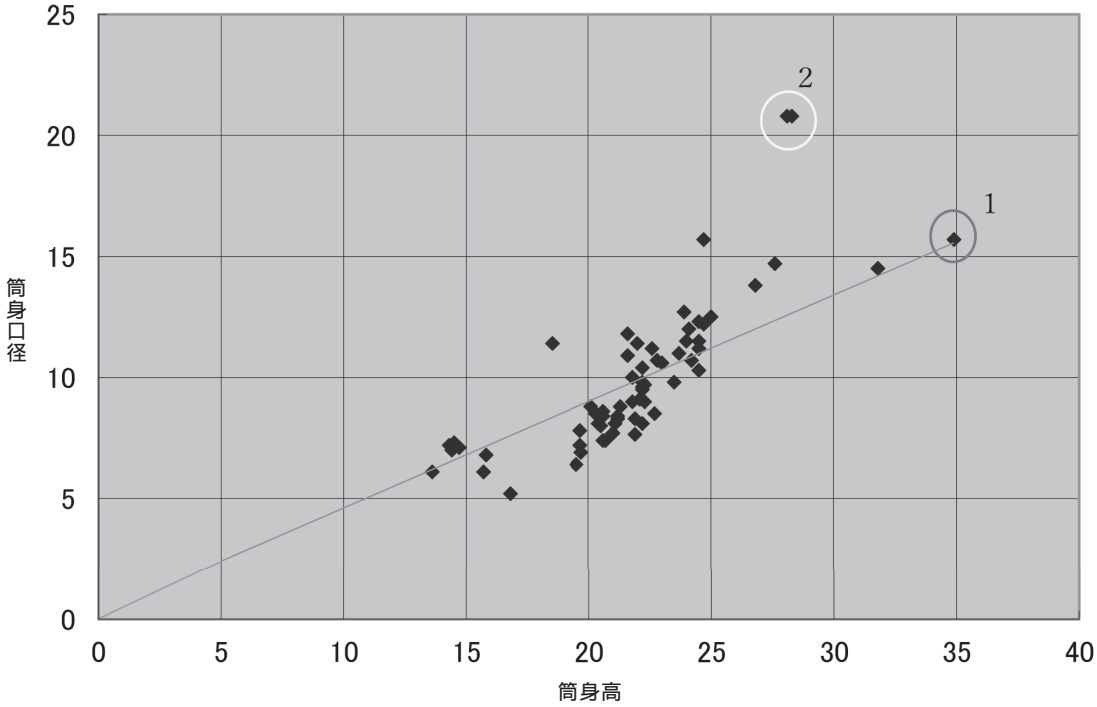
地方	銅板製	銅鋳製	鉄製	
東北	8	22		30
関東	14	20		34
中部	25	37		62
近畿	36	109	12	157
中国	5	23	1	29
四国	24	17		41
九州	21	164	3	188
	133	392	16	541

表５　九州・近畿における紀年銘銅製経筒の法量平均値変遷

	九州		近畿	
	筒身高	筒身口径	筒身高	筒身口径
１１００	25.4～27.9 平均　26.5	平均　12.1	34.9	15.7
１１２５	14.2～27.3 平均　22.9	4.8～13.5 平均　8.2	31.8	11.4～16.5 （熊野　最大径 33.0） 平均　13.7
１１５０	18.8～32.3 平均　求菩提 19.5 その他 26.1	4.2～10.2 平均　求菩提 4.7 その他 7.7		14.2
１１７５	平均　21.6	6.9～8.1 平均　7.4	24.1～26.8 平均　25.0	10.6～14.9 平均　12.6
１２００			22.8～23.0 平均　22.9	10.5～10.7 平均　10.6

◎　単位はセンチメートル。小数点第二位以下は四捨五入。
◎　総高、筒身径、底径を一部用いている。
◎　単独の数値は一例のみであることを示す。
◎　九州の「求菩提」は「求菩提型」経筒のことを指す。
◎　近畿の「熊野」は和歌山県・熊野本宮経塚出土の銅板製経筒のことを指す。
本経筒は陶製外容器の銘文から保安２（1121）年に大般若経一部600巻を50巻ずつ12本の経筒に入れ、埋納したものの一つであることがわかっている。

表６　銅製経筒法量表（近畿）



単位cm　１…金峯山経筒　２…那智経筒（那智タイプ　東国型）

表 7　関係事項略年表

1007	藤原道長の金峯山埋経	
1052	末法初年	
1051 ～ 1062		前九年合戦
1083 ～ 1087		後三年合戦
1088・1090	藤原師通の金峯山埋経	
1092	白河上皇の金峯山埋経	
1100 前後		初代清衡、平泉転居
1105		一基の塔および多宝寺建立
1117 頃		金銀字交書一切経写経事業開始
1124		金色堂上棟
1126		中尊寺鎮護国家大伽藍落慶
1128		初代清衡、逝去
1157		二代基衡、逝去
1170		三代秀衡、鎮守府将軍任官
1187		三代秀衡、逝去
1189		奥州合戦、奥州藤原氏滅亡

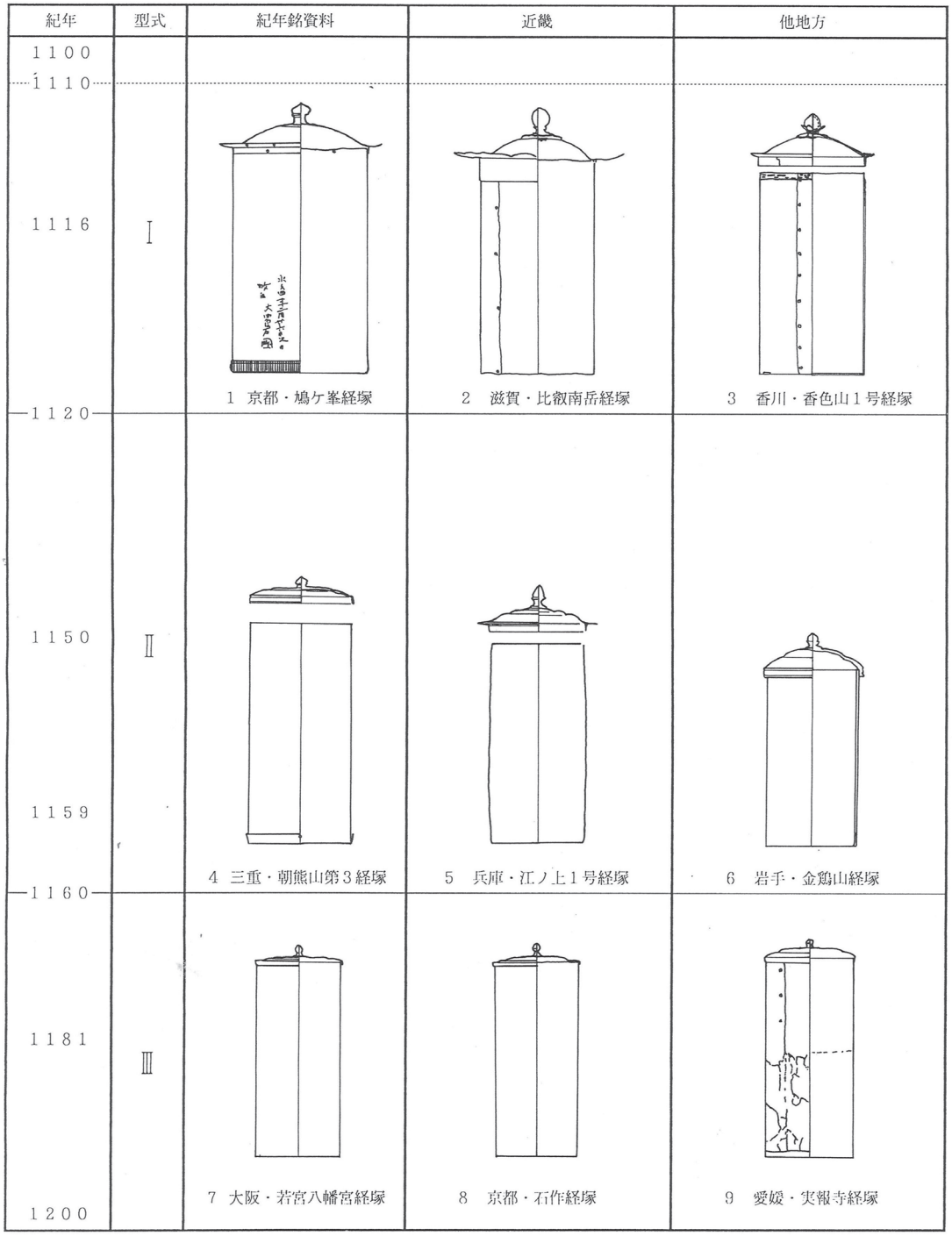


図1　近畿型銅製経筒編年図（S＝1/8）

出典　1　蔵田蔵 1965「経塚論9」『MUSEUM』177
2　蔵田蔵 1965「経塚論8」『MUSEUM』176
3　善通寺市教育委員会 1996『香色山山頂遺跡群調査報告書』
4　奈良国立博物館編 1977『経塚遺宝』東京美術
5　兵庫県教育委員会 1987『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』
6　蔵田蔵 1963「経塚論2」『MUSEUM』148
7　蔵田蔵 1965「経塚論8」『MUSEUM』176
8　蔵田蔵 1965「経塚論9」『MUSEUM』177
9　『愛媛県史　資料編　考古』1986

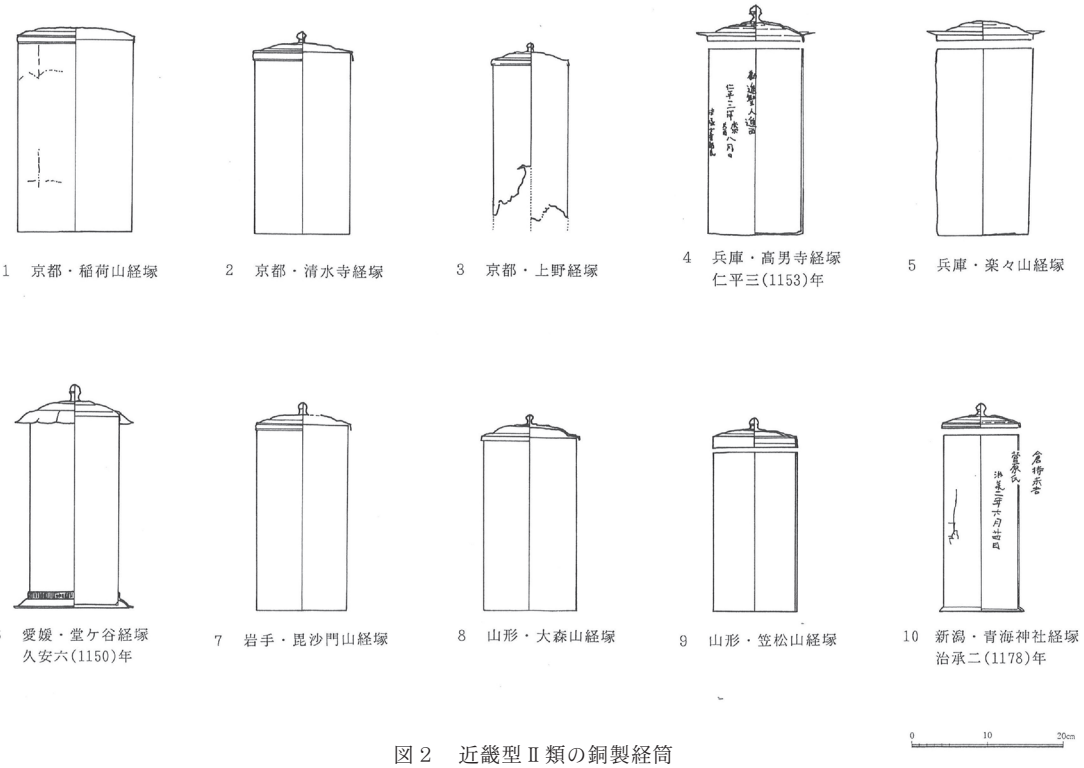


図２　近畿型Ⅱ類の銅製経筒

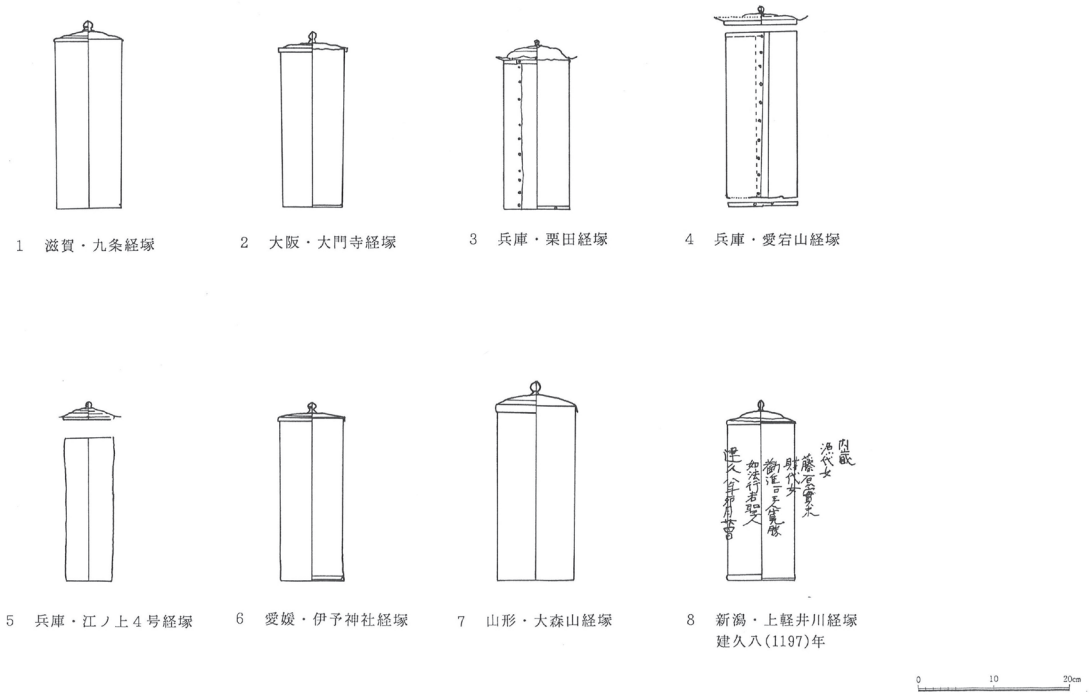


図３　近畿型Ⅲ類の銅製経筒

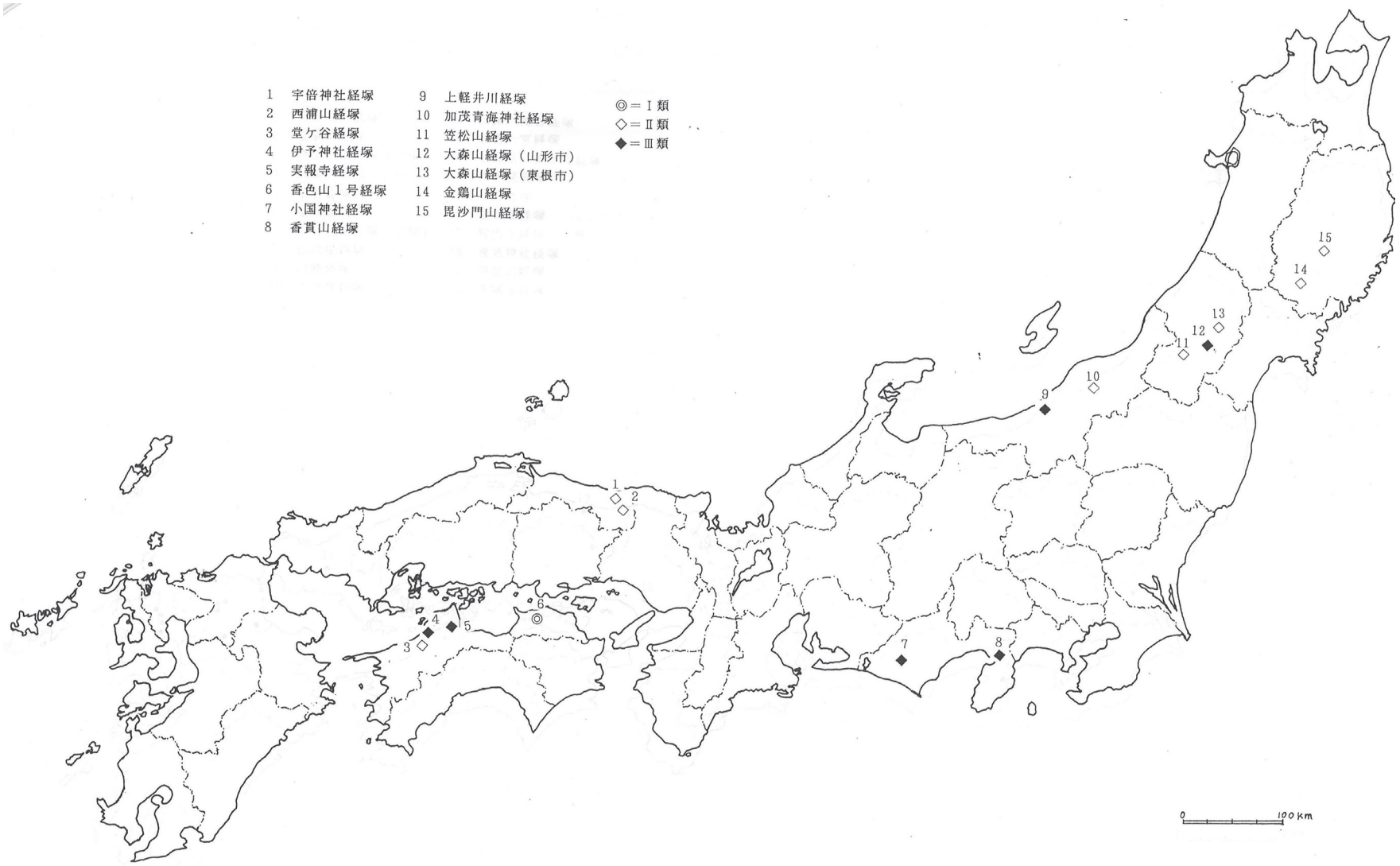


図４　近畿型銅製経筒分布図（他地方）

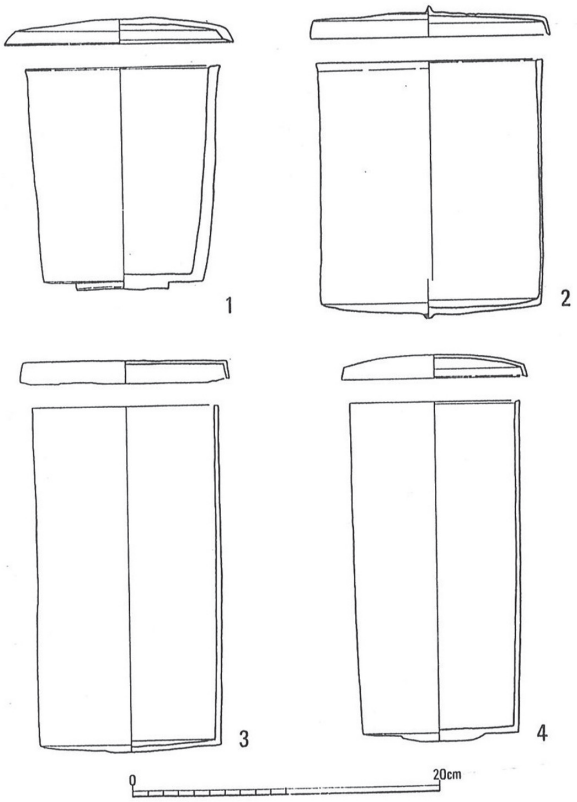


図５　那智タイプ（1、2）、
　　神倉山タイプ（3、4）

1　南根久保Ｂ（福島県白河市）
2　鶉崎（宮城県黒川郡大郷町）
3　下牧（長野県伊那市）
4　神倉山第２（和歌山県新宮市）

出典　杉山洋 1983　861 頁 第６図

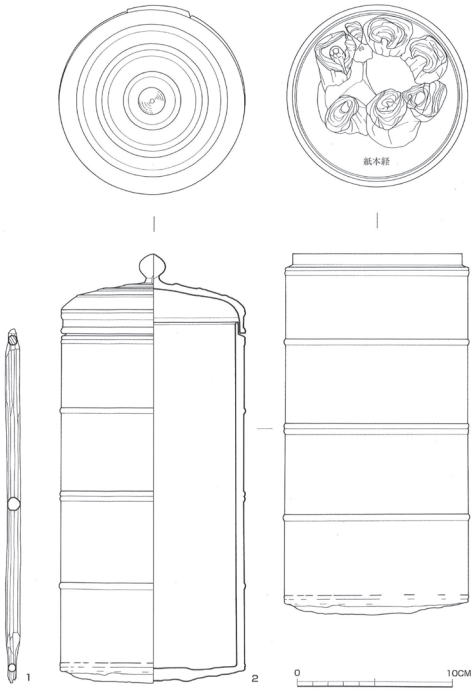


図６　上ノ原経塚（福島県いわき市）出土銅鋳製経筒
出典　財団法人いわき市教育文化事業団編 1998
57 頁　第 28 図

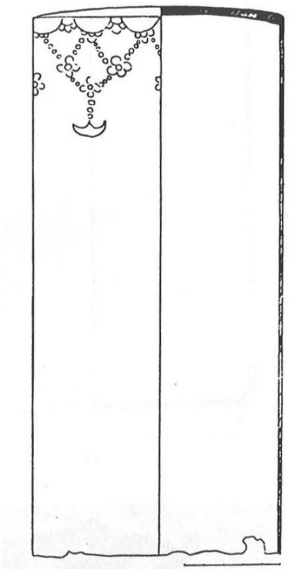


図７　東城寺経塚（茨城県土浦市）出土
　　天治元（1125 年）銅鋳製経筒
出典　蔵田蔵 1963「経塚論３」『MUSEUM』152